

第 25 回女子美パリ賞 報告書

井手元 咲良

目次

プロフィール（経歴、展覧会歴、受賞歴）	1
国際芸術都市滞在の動機・目的	4
滞在目的	
日本の庭とフランスの庭	
制作・研究活動	5
パリ市や郊外の庭	
パリ 2024 オリンピック・パラリンピック	
パリにおける日本庭園	
庭と画家	
制作の様子	
展示	
その他	
結び	
参考文献	

【プロフィール】

井手元咲良 Sakura Idemoto

〈略歴〉

広島県を拠点に活動

2000 年 広島県で生まれる

2018 年 女子美術大学 芸術学部美術学科洋画専攻 入学

2022 年 女子美術大学 芸術学部美術学科洋画専攻 卒業 女子美術大学 大学院美術研究科 博士前期課程
美術専攻 洋画研究領域 入学

2024 年 女子美術大学 大学院美術研究科 博士前期課程美術専攻 洋画研究領域 卒業

2024 年 「Cité Internationale des Arts パリ国際芸術都市」へ研究員として派遣

〈展覧会歴〉

【個展】

2025 年 2 月 オープンスタジオ「Reverie」(Cité Internationale des Arts、パリ)

2023 年 11 月 個展 (オークウッドレジデンス青山、東京)

2021 年 6 月 「SAKURA 展」(クレイトンベイホテル、広島)

【グループ展】

2025 年 2 月 EXPOSITION COLLECTIVE「Souvenirs LATENTS」(THE MUISCA ART SPACE、パリ)

2024 年 4 月 「ART AWARD TOKYO MARUNOUCHI 2024」(行幸地下ギャラリー、東京)

2024 年 3 月 「2023 年度 女子美術大学大学院 博士前期課程修了製作作品展」(女子美術大学 女子美ア
ートミュー ジアム、神奈川)

2024 年 2 月 「2023 年度 第 47 回東京五美術大学連合卒業・修了制作展」(国立新美術館、東京)

2023 年 9 月 「第 32 回奨学生美術展」(佐藤美術館、東京)

2023 年 8 月 「第 10 回 未来展-日動画廊 美術大学学生支援プログラム-」(日動画廊本店、東京)

2023 年 8 月 「第 36 回日本の自然を描く展」(上野森美術館、東京)

2023 年 6 月 「第 27 回日仏現代国際美術展」(国立新美術館、東京)

2023 年 1 月 「Group Exhibition : EPIC PAINTERS Vol.11」(THE blank GALLERY、東京)

〈主な受賞歴〉

2025 年 2024 年度芙蓉・女子美 Venus ファンド賞

2023 年 2023 年度 第 25 回「女子美パリ賞」

2023 年「第 32 回奨学生美術展」協賛賞(株式会社中里賞、株式会社名村大成堂賞、PIGMENT TOKYO
賞、松田 油絵具株式会社賞)

2022 年 「第 57 回 神奈川県美術展」 大賞

2022 年 女子美術大学 卒業制作 卒業制作賞

2021 年 第 42 期国際瀧富士美術賞 グランプリ、優秀賞

【国際芸術都市滞在の動機・目的】

滞在目的

私が今回「女子美パリ賞」に応募した目的は、フランスの庭園からインスピレーションを得るためである。私はこれまで身近な風景を元に、目の前で変わっていく時間性やリアルな感覚を、写実的描写と抽象的表現を用いてひとつの画面に描くことで、自身が感じた「現象」を絵画に表してきた。そのため、私有地と外界との間に「理想の世界観」を創り出し、現実と想像が融合したとも言える"庭園"に共感を覚え、現在は、庭園における自然観や思想、植物などを調べながら自身の思う「理想郷」を描いている。今回のパリ滞在では、自然、特に庭園とパリでの経験にインスピレーションを受け、西洋と東洋の風景、文化、価値観のコントラストの探求をしつつ、制作を行った。

日本の庭とフランスの庭

庭園とは、花や果物、樹木、芝生などの植物の「自然的要素」に「人工的要素（池、彫刻、洞窟など）」を組み合わせた人間によって創造された空間である。庭園は、時代や国、その土地の文化や思想、社会などによりデザインや構成は様々である。

日本の庭園は、自然との共生の思想から生まれている。古来より日本人は、山や川、海、木や岩など自然豊かに恵まれた場所に囲まれ、自然を畏れながらも敬い、生きてきた。そのため、自然の全てに霊魂が宿るアニミズム的思考のもと、岩や木などそのままの状態である自然物を取り入れ、自然風景的な庭を作庭し、精神的な世界観を表現していた。

一方、フランスの庭園は、個人的あるいは政治的な権力を示す場の一つとして造られてきた。イタリア式庭園から影響を受けたが、幾何学、光学、水力学、地形学などの技術・科学的進歩や新しい測定機器の使用などにより、庭園のデザインに変化をもたらしてきた。特に花や植物などで刺繍のようにみせる「刺繍花壇(パルテール)」が特徴的である。17世紀、アンドレ・ル・ノー トルが、ヴォー・ル・ヴィコント城やヴェルサイユ宮殿など、絶対的権力の象徴であるフランス式庭園を手がけたことで、フランス式庭園が注目される。日本庭園のように自然共生とした造園思想とは反対に、本来敵わないはずの自然を制御し、思いのままに整形して自身の力を象徴させることを必要としていた。敷地を樹林などで囲み、中央から中心軸を引き両サイドに花壇や並木、通路、噴水、池などを左右対称に配置することで、奥行きと広がり強調させている。あらゆる研究などを重ねて生み出したフランス式庭園は、日本庭園の自然的な美しさとは反対に人間としての力強さ、いわゆる「人工的な美しさ」を持っている。

今回のパリ滞在中では、そういった伝統的なフランス式庭園を含め、様々な庭へ訪問した。実際に訪れたパリ市内や郊外、フランスの古城の中で特に印象的であった庭園または公園について時系列に紹介していく。また今年は「パリ 2024 オリンピック・パラリンピック」も開催されたため、その時のパリの庭での様子なども取り上げていく。

【制作・研究活動】 ※太字の箇所を紹介する。

[滞在期間：2024 年 4 月 4 日～2025 年 3 月 27 日]

2024 年

- 4 月 **チュイルリー庭園 Jardin des Tuileries**
ソー州立公園 Parc départemental de Sceaux
- 5 月 ボランティア活動 **パリ植物園 Jardin des Plantes**
リュクサンブール公園 Jardin du Luxembourg
- 6 月 **パレ・ロワイヤル庭園 jardin du Palais-Royal**
プロムナード・ブランテ Promenade plantée
ピュット＝ショーモン公園 Parc des Buttes-Chaumont
シャンボール城 Château de Chambord
シュノンソー城 Château de Chenonceau
シュヴェルニー城 Château de Cheverny
- 7 月 **サヴォア邸の庭**
パリオリンピック①モンソー公園 Parc Monceau
- 8 月 **フォンテーヌブロー宮殿 Château de Fontainebleau**
ヴォー＝ル＝ヴィコント城 Château de Vaux-le-Vicomte
- 9 月 **パリオリンピック②ヴェルサイユ宮殿 Château de Versailles**
クロード・モネ財団 Maison et jardins de Claude Monet-Giverny シヴェルニーの庭
- 10 月 **プティ・パレ Petit Palais イギリスへ訪問**
- 11 月 **ナンシーへ訪問**
チュイルリー庭園のクリスマスマーケット
- 12 月 **ベルギーへ訪問**
モン・サンミシェル Mont Saint-Michel

2025 年

- 1 月 **ティノ・ロシ庭園 Jardin Tino Rossi**
オテル・ド・サンス庭園 Jardin de l'Hôtel de Sens
芸術の庭園 - アルベルト・シュバイツァー Square Albert Schweitzer
- 2 月 **ベルシー公園 Parc de Bercy**
オープンスタジオを開催
ヴォージュ広場 Place des Vosges
ギャラリーで展示
- 3 月 **モンマルトル博物館**
エトルタ庭園
パリ花公園 Le Parc Floral de Paris
ベルシー島
ラ・ヴィレッド公園 Park de la Villette
アルペール・カーン庭園 Albert-Kahn Museum and Gard



シャンボール城と薔薇

パリ市や郊外の庭

チュイルリー庭園 Jardin des Tuileries

(訪問日：2024 年 4 月 13 日)

75001 Paris, France

<https://parisjetaime.com/eng/culture/jardin-des-tuileries-p3545>

- ・ 建造開始年 1664 年(起源: 1564 年)
- ・ 面積 約 25 ヘクタール
- ・ 様式や特徴 フランス式庭園(起源：イタリア式庭園)。
- ・ 背景と庭の変化



16 世紀、フランソワ I 世は母のルイズ・ド・サヴォワのためにルーヴル付近に邸宅と土地を購入。当時は瓦(チュイル)の制作工房があったため、「チュイルリー(Tuilerie)」と名付けられる。1564 年、アンリ 2 世の王妃カトリーヌが建築家フィリベール・ド・ロルムに依頼し、チュイルリー宮を作らせ、息子フランソワ II 世を住まわせる。(宮殿は、1871 年のパリ・コミュンの際に火災で消失。) 1664 年、ルイ 14 世と宰相コルベールは造園家アンドレ・ル・ノートルに、公園を再構築してもらい、現在のようなフランス式庭園へと変わる。1991 年にユネスコの世界遺産に登録。2005 年以降、ルーヴル美術館の管理下となる。

住居地から徒歩で約 30 分なため、散歩で訪れていた庭園の一つ。ルーヴル美術館とコンコルド広場の中間にあるパリ市最古の庭園で、市内では 2 番目に大きい庭園とされている。

庭園には中心にある大きな噴水を含めて 4 つ設置されている。子供たちがおもちゃのヨットを泳がせて遊び、鴨がよく水浴びもしている。噴水の吹上による水の音が心地よく、噴水の周りに人が椅子に座って本を読み、昼寝するなど自由にくつろいでいる。(写真①) 観光だけでなく、市民の憩いの場としても成り立っている。近接には、ルーヴル美術館、オランジュリー美術館、パリ装飾美術館、オルセー美術館、ジュ・ド・ポーム国立美術館といくつもの美術館があり、庭園内にもマイヨールやロダンなど古代から現代までの彫像やオブジェが展示されている。(写真②) まるで広大な屋外美術館のような庭園。自身は、特にセーヌ川に面した「Terr. du Bord de l'Eau(水際のテラス)」(写真③)という場所がお気に入りである。四角に刈り込まれた木々が並んだ通りで、夏場は風が通って涼しい。また庭園より高い位置にあるため、庭園の景色を全体的に見渡すことができる。庭園には、毎年 6 月から 8 月の期間に移動遊園地がやってくるが、今年はパリオリンピックの影響でブローニュの森の方へ変更となっていた。



写真①



17 世紀からある花壇



写真②



写真③



園内にあるメリーゴーランド

・クリスマスマーケット [2024 年 11 月 16 日～2025 年 1 月 5 日]

中世のドイツから始め、ヨーロッパで伝統的に行われるクリスマスに向けた市場。かつてはシャンゼリゼ通りで行われていたが、2018 年以降はチュイルリー公園へ変更となった。クリスマスの装飾やイルミネーションが飾られ、観覧車やメリーゴーランドなどのアトラクションも設置される。屋台では、ホットワインやホットチョコレート、ソーセージ、シュトーレンなどの食品、クリスマスオーナメント、雑貨などが販売されている。（訪問日：2024 年 11 月 28 日、12 月 20 日）



ソー州立公園 Parc départemental de Sceaux

（訪問日：2024 年 4 月 28 日）

38 Av. Alphonse Cherrier, 92330 Sceaux, France

公式サイト <https://domaine-de-sceaux.hauts-de-seine.fr/>

- ・面積 約 220 ヘクタール
- ・様式や特徴 フランス式庭園
- ・背景

国王ルイ 14 世の宰相コルベールが土地を購入し、庭を

造園家アンドレ・ル・ノートルに、城をル・ブランに建設を依頼した。コルベール亡き後は、息子のセニユレー侯爵が



引き継ぎ、その際に領地の拡大や大運河、テラス、噴水や滝などを新たに造らせた。しかし、フランス革命の時代にほとんど破壊され、1798 年には、地所を購入した農業開拓者が残された資材を売り払う。1828 年、農業開拓者の娘のトレヴィーズ公、ナポレオン・モルティエにより、修復が行われる。様々な所有者の手に渡り、1923 年にセーヌ県が購入。その後、歴史的建築物に指定されて一般公開される。

自身が、友人とピクニックする際に訪れた公園。パリ郊外に位置し、周りは一軒家が並ぶ静かな住宅街に囲まれている。宰相コルベールが自身の権力の象徴として建設されたが、現在は、散歩やピクニックなどを行うほど市民の憩いの場となっている。特に、八重桜の木が植えられたエリアがあり、花見の会場として人気である。園内には滝や川もあり、森とを感じるほどの広大さに驚く人も多い。大地と水の美しさが感じ取れる公園である。一部が自然保護区とされるほど、動植物たちにとっても居心地の良い場所である。



ピクニックでのスケッチ

リュクサンブール公園 Jardin du Luxembourg

(訪問日：2024 年 5 月 16 日)

75006 Paris, France

公式サイト <https://jardin.senat.fr/en/practical-information.html>

- ・面積 約 22 ヘクタール
- ・様式や特徴 フランス式庭園
- ・背景

宮殿が立つ前は、13 世紀頃から続く修道院があった。

園内にある果樹園は、当時その修道士たちが果物を育てるのに利用していたものである。その跡地に、アンリ 4 世の後マリー・ド・メディシ スのためにリュクサンブール宮殿を建設。宮殿は現在、フランス上院（元老院）の議事堂として利用している。



リュクサンブール宮殿に付属する庭園で、パリ市内で 4 番目に大きい庭園とされている。宮殿自体は、夫のアンリ 4 世が亡くなった悲しみを癒すために生地のイタリアのトスカーナを思い起こさせるようデザインされている。地元民からは「リュコ」とあだ名で呼ばれるほど市民の憩いの場となっている。園内には、

宮殿を含めて美術館や果樹園、養蜂場、泉（写真④）、並木道、芝生、彫像作品など様々なエリアがある豊富な公園で、地図で見るとより実際に歩くと広く感じる。チュイルリー庭園と同じく、噴水や広い道には野外用の椅子が多く並べられており、雑談や昼寝、読書する人などがあふれている。

自身は草を波紋のようにデザインされた芝生（写真⑤）に、日本の枯山水で見られる砂利で水紋を表現する技法（砂紋）と似ているようで、目が惹かれた。草を残した状態と地面が見えるほど低く刈ったところを交互にすることで、そのように見せているようだ。



写真④「メデシスの泉」



写真⑤

ビュット＝ショーモン公園 Parc des Buttes-Chaumont

（訪問日：2024 年 6 月 13 日）

75019 Paris, France

公式サイト <https://www.paris.fr/lieux/parc-des-buttes-chaumont-1757>

- ・ 建造開始年 1864 年
- ・ 面積 約 25 ヘクタール
- ・ 様式や特徴 イギリス式公園
- ・ 背景

当初は、採石場で、パリ中心部の建物の素材などに使われるほど

フランス革命時から有名。しかし、その後は絞首台や死体置き場、ゴミ捨て場などに利用され、一日中悪臭を放っていた。そのため、市民からは「Chaumont(禿げ山)」と呼ばれて嫌われていた。しかし、19 世紀にパリの改造と繁栄で、ナ



ナポレオン 3 世とオスマン男爵が公園へと改造した。ナポレオン 3 世は、地元の貧しい農民たちに緑の一部を提供することを望んでいたため、不潔で異臭の漂う地域を美しい緑地へ変えることを目的とした。

パリ市の中では、3 番目に大きいとされている公園。元はパリ郊外であったため、平坦地形であるパリ市の中では高低が激しい公園。まるで山の風景を再現されているようで、園内には橋や洞窟などがあり、冒険しているかのような気分になる。



シュノンソー城 Château de Chenonceau

(訪問日: 2024 年 6 月 28 日)

37150 Chenonceaux, France

公式サイト <https://www.chenonceau.com/>

- ・建造開始年 1513 年
- ・面積 約 20 ヘクタール
ディアースの庭園 約 12,000 平方メートル
カトリーヌの庭園 約 5,500 平方メートル
- ・様式や特徴 フランス式庭園
- ・背景



ロワール川の支流・シェール川をまたぐように建設された城。代々、女性が城主で「6 人の奥方の城」とも呼ばれている。16 世紀に宮廷の財務長官トマ・ボイエと夫人カトリーヌ・ブリソネが、マルク家の城塞と水車を取り壊し、塔だけ残してシュノンソー城を建設。1535 年、フランソワ 1 世は、負債の清算のためにこの地を王領に組み入れた。アンリ 2 世は、寵妃ディアース・ド・ボワチエに城を与えた。シュノンソー城を王家の領地から排除したため、フランス革命時に城は救われた。1559 年、アンリ 2 世の亡き後、夫人カトリーヌ・ド・メディシスは、ディアースから城を取り上げる。イタリアの装飾様式を取り入れ、若い国王の権力を制定。それ以降、アンリ 3 世の妻ルイーズ・ド・ロレーヌ、18 世紀にルイーズ・デュパン、19 世紀にマルグリット・ペールズ、そして第二次世界大戦時は病院と改築され、看護婦長シモーヌ・ムニエへと渡る。

森の木々に囲まれた広い道をまっすぐ進むと、その姿は見えてくる。橋の向こうに城がたたずんでおり、

歴代の城主は全員女性だったためか、厳格なフランスの城とは違ってやや小さめで可愛い雰囲気
の城であった。そして城の両側にはタイプの異なる2つの庭園がある。ディアヌの庭園(写真⑥)は、
ディアヌ・ド・ポワチエに贈られた庭園。直角に交差する小路と斜めに交差する小路が、ワタスギギク
の渦巻き装飾のある8つの三角形の芝生を縁取っている。中央には当時の噴水を再現しており、低木
や花壇が庭園の厳格な幾何学的構成を際立たせている。夏には100本以上のハイビスカスが花を
咲かす。カトリーヌの庭園(写真⑦)は、カトリーヌ・ド・メディシスにより造園された庭園。円形
の池の周辺に5つの芝生の庭があり、刈り込まれた庭木がリズムカルに植えられている。低い石垣
に囲われており、薔薇が壁面に沿って誘引されている。木立した薔薇と低く丸く刈られたラベンダー
の畝が、調和のとれた縁取りを成している。ディアヌ庭園は幾何学的デザインで高貴な女性を連想
されられる。反対にカトリーヌ庭園は、ピンクの薔薇や丸く刈り込んだ庭木などにより可愛い
印象を受ける。まるで女王たる厳格かつ権力的な一面と、女性の柔らかい要素を表現したか
のような庭園である。他にも近くの森には花畑や迷路の庭、イギリス式の「緑の庭園」など
がある。



写真⑥ ディアヌの庭園



写真⑦ カトリーヌの庭園

Château de Vaux-le-Vicomte ヴォー＝ル＝ヴィコント城

(訪問日：2024年8月14日)

77950 Maincy, France

公式サイト <https://vaux-le-vicomte.com/>

- ・庭の建造開始年 1653年
- ・面積 約500ヘクタール(庭園：約33ヘクタール)



・様式や特徴 フランス式庭園

・背景 ヴェルサイユ宮殿の元となった城で、17世紀にルイ14世の財政監督官ニコラ・フーケにより建てられた。セヌ＝エ＝マルヌ県の一部の土地を購入し、建築家ルイ・ル・ルヴォー、画家(装飾家)シャルル・ル・ブラン、庭師アンドレ・ル・ノートルにそれぞれ担当させ、自身の権力と莫大な財産を誇示するために建設した。その後はルイ14世を招き、1661年には壮大なパーティーを開いた。それにより、ルイ14世は嫉妬し、ニコラ・フーケの野心的で国の財政をかなり使い込んだこともあり、ニコラ・フーケは逮捕される。その後、家具やタペストリー、絵画など城内のほとんどのものを押収され、1705年に城は売りにだされる。最終的には、美術愛好家アルフレッド・ソミエが城を買い取り、修復される。

フランス・バロック庭園の初期の傑作と言われる程の素晴らしい庭園。平坦である地形を生かし、平らな見通し線を縦横に配したオープンな軸線構成を展開するなど、見事にコントロールし、遠近感を重視している。園内には遊歩道、池、噴水、彫像、荘厳な樹木、花木の木立、黄金のヘラクレス像などが設置されている。入り口の左右に配した庭(前庭)の、美しく整えられた芝生に均一に配置された庭木、銅像なども置かれており、入り口から高揚した気持ちになる。(写真⑧) テラスなどから観る壮大な見晴らしはフランス式庭園において重要な部分である。バルコニーから庭園を眺めるのも良いが、ここでは城内にあるバロック様式の螺旋階段を登った先にある塔から眺める景色が素晴らしい。これが全て植物なのか疑うほど、徹底的に整えられ、幾何学的に配置された庭園の美しさが全体的に見渡せる。(写真⑨) ヴォー＝ル＝ヴィコント城の庭園の特徴である刺繍花壇(パルテール)は、1920年、アシーユ・デュ・シュューヌが植えたシゲの花壇が、老朽化により2019年に根こそぎ撤去される。ド・ヴォギュエ家はプロジェクトが完了するまでの間に一時的にアーティストに託すことにした。そして、パトリック・ウルカードの"Les Rubans Ephemeres(儚いリボン)"を選出した。20世紀初頭のアシーユ・デュ・シュューヌのアラベスク模様からインスピレーションを受けており、5000平方メートルの芝生の上に、390枚の傾斜したアルミニウム版で構成されている。(写真⑩) 陽光に反射して白く輝いている。



写真⑧



写真⑨



写真⑩



Château de Versailles ヴェルサイユ宮殿

(訪問日：2024 年 9 月 6 日)

Place d'Armes, 78000 Versailles, France

公式サイト <https://www.chateauversailles.fr/>

- ・建造開始年 1631 年
- ・面積 約 1,070 ヘクタール(庭園：約 800 ヘクタール)
- ・様式や特徴 フランス式庭園

・背景 元々は、ルイ 13 世とアンヌ・ドートリッシュが狩猟の館として使っていた城館であった。17 世紀半ばに訪れたルイ 14 世が場所を気に入り、建築家ルイ・ル・ヴォーや造園家アンドレ・ル・ノートルなどの職人を招いて増築し、ヴェルサイユ宮殿へと変貌した。そして、ルイ 14 世～16 世の時代まで国王の居城として使用されてきた。フランス革命以降、ナポレオン 1 世の時代に更に増築される。1837 年、国王ルイ・フィリップの時代にフランス歴史博物館として生まれ変わる。そして、1979 年に宮殿、庭園とともにユネスコ世界遺産に登録され、有名な観光地となる。



ヴェルサイユ宮殿 オランジュリー

ヴォー＝ル＝ヴィコント城を元に建設した城ということもあり、庭園の広大さや幾何学に配した庭園の美しさには圧倒された。造園家アンドレ・ル・ノートルに庭園の造園と改修を委託し、国王第一画家となったチャールズ・ル・ブランに内装や彫像、噴水などの装飾を設計させるなど、名立たる職人たちに依頼し、また国王自らが審査も行い、細部まで注視されている。庭園はその後大規模な改修作業などが行われ、城館よりも主に庭園に力を注いでいたとされている。

自身はここでは特に噴水などの水景に着目した。日本庭園でも滝や池、砂利で水景を表現した枯山水など、水は庭園において必要不可欠な存在である。フランス式庭園における噴水は水(自然)を逆さに吹き上げさせることから「(自然の力に)逆らう」という権力者の強い意思があるとも言われている。特にヴェルサイユ宮殿は、アポロンやドラゴン、動物との戦いなどの「力」を表しているかのようなデザインの噴水が多くある。園内には約 1000 個以上の噴水が設置されているとのことだ。





写真 「アポロンの噴水」…ルイ 14 世により、太陽神で王の象徴とされるアポロンが設置された噴水。この水景にはルイ 13 世の治世下(1636 年)からあり、当時は「白鳥の湖」と呼ばれていた。



写真 「フローラ(春)の泉」…「四季の噴水」の内の一つ。路地の 4 つの交差点にそれぞれ 4 つの噴水(「四季の噴水」)が 1670 年代から設置されている。



写真 「ラトナーの噴水」…オウィディウスの『変身物語』から着想得た噴水

Mont Saint-Michel モン・サンミシェル

(訪問日：2024 年 12 月 30 日)

Mont-Saint-Michel 50170, France

公式サイト <https://www.abbaye-mont-saint-michel.fr/en>

- ・ 建造開始年 708 年
- ・ 面積 島全体：約 0.97 平方キロメートル
中庭(回廊)：不明
- ・ 様式や特徴 ロマネスク様式、ゴシック様式



・背景

708 年、聖オベール司教が、夢の中で大天使ミカエルのお告げを受け、モン・トンプ Mont-Tombe という島に礼拝堂を設置したことが始まりである。966 年、ノルマンディー公リチャード 1 世は、聖ベネディクト会修道士を住まわせた。ロマネスク様式の教会も造られるなどキリスト教西方全 域で重要な巡礼地となる。 その後も、14 世紀の英仏百年戦争では、両国間の要衝に位置するため城塞として利用し、18 世紀のフランス革命時には反対制派を収容する監獄として利用するなど様々。 1874 年に歴史的建築物として指定され、1979 年には世界文化遺産にも登録された。現在も、十数人の僧侶と尼僧などが住んでいる。

庭園は、モンサンミッシェルの北面にあるゴシック様式の 3 階建ての建築物「La Merveille (驚異なるもの)」の中にある。 少し薄暗い修道院の中を出た先にある庭園は、陽の光に照らされて緑に輝く芝生が美しい。「天と地を結ぶ橋」と呼ばれている理由に納得がいく。僧侶たちの瞑想の場としても同じく、芝生のみの簡素なデザイン（昔は花壇や植木などがあった。）は、日本でいう龍安寺の石庭と似ている。島の頂上辺りに位置するこの回廊(庭園)は、空に開かれた庭を通じて神に近づくことができるとされている。 庭園は 17 世紀始めに作られたが、下の階に浸水してしまう理由で 1676 年には廃止となる。しかし、1965 年に建築家フロワドヴォーにより工事が行われ、ブルノー牧師とセンヴィル牧師の設計で新たに庭園が造られたようだ。 庭園の周りを囲む回廊には、137 本もの柱が三脚状に交互に並んで配置されており、回廊の丸天井と屋根を支えている。柱の内側にはカーンの石灰岩を使ったとされるアーケードがあり、キリストや聖フランソワ、ぶどう収穫人などの人物やシンボルのようなものが彫られている。レースのように彫られている植物や花は、神の創造の多様性を表しており、生命のエネルギーや地上の楽園を表したかのような場所である。



Park de la Villette ラ・ヴィレッド公園

(訪問日：2025 年 3 月 24 日)

211 Av. Jean Jaurès, 75019 Paris, France

公式サイト <https://www.lavillette.com/>

・面積 約 55 ヘクタール



・様式や特徴 パリ最大の公園。近未来都市風の公園。

・背景

1874 年～1974 年においては食肉処理場であった。その後、1979 年にミッテラン政権下において行われたパリの再生計画「Grands Projets」にてプロジェクトが開始された。1982 年に、国際コンペティションが行われ、建築家ベルナール・チュミの案が選ばれた。

科学技術博物館、音楽とダンス専用の講堂、近隣に開放された都市空間の 3 つの要素を取り入れるべく、デザインされた公園とのことだ。園内には博物館や映画館、子供達の遊び場、運動場など多くの施設が設置されており、遊園地のような豊富さである。河に囲まれており、園内を分けるように中心に流れているルルコ運河が特徴的。(写真⑪)その近くには赤色のフォーリー(東屋)がグリッド状に置かれている。(写真⑫) 脱構築主義のポストモダニズム建築であるベルナール・チュミの代表作の一つである。上がるとフォーリー同士が橋の通路で繋がっており、歩きながら遠くの風景を見渡すことができる。(写真⑬) 施設などで楽しめつつも、自由に園内を歩き回れるようデザインされている。自身が訪れた日は、平日なためか人通りは少なかったが、散歩やサイクリング、ランチなど、思い思いに自由に過ごしていた。



写真⑪



写真⑫



写真⑬

パリ 2024 オリンピック・パラリンピック

今年は、パリでオリンピック・パラリンピックが開催された。オリンピックは2024年7月26日から8月11日まで、パラリンピックは2024年8月28日から9月8日まで行われた。道を柵で封鎖するなど交通規制がかかり、不便なこともあったが、エッフェル塔やコンコルド広場、ヴェルサイユ宮殿などパリの歴史的な名所が競技会場となり、注目を集めた。ここでは、そんなオリンピックやパラリンピック時の庭の様子をお見せする。



写真：コンコルド広場 会場風景



写真：パリ市庁舎

モンソー公園 Parc Monceau

(訪問日：2024年8月1日)

35 Bd de Courcelles, 75008 Paris, France

公式サイト <https://www.paris.fr/lieux/parc-monceau-1804>

元はシャルトル侯爵(オルレアン公)の所有地であった公園。1785年、大蔵大臣シャルル＝アレクサンドル・ド・カロンヌはパリを区画し、密輸に対抗するためにフェルミエ・ジェネリュの壁の建設を開始。フランス革命時は国有財産となったため、オルレアン家に返還されたが、1852年に国が修得。1861年、ナポレオン3世により現在のようなイギリス式公園へと変化する。園内にはピラミッドやローマ風の円柱が残っているなど、シャルトル侯爵時の庭園の面影が感じ取れる。住宅地に囲まれた場所にあり、散歩やジョギングなど市民の憩いの場として成り立っている。オリンピック時には、園内の一部の花壇がオリンピック風にデザインされ(写真⑭)、芝生のエリアでは、ファンゾーンとしてオリンピック競技の中継が上映されていた。(写真⑮) ファンゾーンでは、飲食は可能だが、お酒やビン類は禁止で入る際に、警備員にチェックされるなど徹底していた。



写真⑭



写真⑮

チュイルリー庭園 Jardin des Tuileries

(訪問日：2024 年 8 月 25 日)

パリオリンピック時には、庭園の中心部にある噴水に気球型聖火台「La Vasque」が設置された。日中は写真のように接地しているが、夜になると空へ上がり、遠くからでも燃える聖火(ミストと光による擬似炎)が見られる。好評につき、2028 年のロサンゼルスオリンピックまでの間、夏季限定で今後も設置をしていくようだ。



Château de Versailles ヴェルサイユ宮殿

(訪問日：2024 年 9 月 6 日)

パリ 2024 オリンピック・パラリンピックで、ヴェルサイユ宮殿は馬術と近代五種の競技会場として使用された。写真は、「パリ 2024 パラリンピック」の馬術(フリースタイル)の会場風景である。庭園中央の河川の向こうに、仮設競技場と観客席が設けられ、競技を行った。かつて 1924 年のオリンピック時には、近代五種や射撃競技も行われていた。また今回は、オリンピックの開会式で登場した有名な機械仕掛けの馬「ゼウス」が展示されるなど、パリオリンピックにおいて重要な会場場所の一つである。



以上のように、オリンピックでは歴史的な名所を舞台とし、街全体を大いに活用していた。そして今回のオリンピックを機に、都市や環境問題なども見直されたようだ。現在は、パリの歴史的建造物などを残すためにも会場跡地を含めたパリ市の緑化、自動車の交通規制など様々なプロジェクトが立っているとのことだ。その一つの例として、パリ市庁舎前の前庭を取り上げる。

パリ市庁舎前の前庭 Parvis de l'Hôtel de Ville

Parvis de l'hôtel de ville, 75004 Paris, France

公式サイト <https://www.paris.fr/pages/le-futur-jardin-memorial-de-la-place-saint-gervais-22026>

オリンピック時に、ファンゾーンとして賑わったパリ市庁舎の前庭は、2024 年 10 月より工事が開始された。シダやオークなど約 150 本の樹木や 2 万株以上の植物が植えられ、約 2,500 平方メートルのスペースが植生化される。「都市の森」というスペース名で、2025 年 6 月に完成する予定とのことだ。



パリ市庁舎の前庭（2024 年 10 月撮影）

他にもコンコルド広場やヴァンセンヌ城の前にある通りなど、パリでは、ヒートアイランド対策と生物多様性の促進のためにも、様々な場所を「緑化」する計画が進められている。そして今年開催されたオリンピックを機に、その計画はかなり進行したように見える。車や人などが多く行き交う都市の中心部に緑が生えることで、地球温暖化対策や空気浄化、また緑により癒しを与えてくれる視覚・心理効果などがえられて心身ともに生活の質の向上が期待される。次のパリオリンピックでは、緑に囲まれたパリ市を見ることが出来るかもしれない。

パリにおける日本庭園

パリでは、パリ博覧会や現地への訪問などにより、芸術や文化など様々な日本の影響を受けている。庭園もその一つである。ここでは、自身が実際に訪れたパリにある日本庭園を取り入れた場所を紹介する。

Le Parc Floral de Paris パリ花公園

(訪問日：2025 年 3 月 19 日)

3 Av. de la Porte d'Auteuil, 75016 Paris, France

公式サイト <https://www.parcfloraldeparis.com/fr>



ヴァンセンヌの森にある公園の一つ。元は軍用地であった場所を、国際園芸博覧会を機に、1969 年に造園家ダニエル・コランにより公園へと変わった。植物に触れて喜びを享受すると同時に提供したスペースで自由に遊ぶよう、人々のニーズを満たすことができる都市の緑地を提供することを目的に、約 3000 種類もの花や植物だけでなく、20 ヶ所もあるパビリオンや熱帯庭園、遊具、四輪自転車ロザリーなどが取り入れられている。そしてパビリオンの中には、盆栽

や禅の庭、日本庭園が設置されている。

盆栽館 盆栽を取り入れた庭園。屋内と屋外にそれぞれ盆栽が展示されている。約 80 作品ものコレクションがあり、中には 200 年以上も前からある盆栽があるようだ。 入り口には、3 世紀頃に中国で生まれ、盆栽の文化は 10 世紀に仏教の僧侶によって日本に伝わったことや、1878 年に開催されたパリ万国博覧会において、フランスで初めて盆栽が紹介されたことなどの歴史が記載されている。 パリでは、イベントが開かれるほど盆栽が人気である。



更に先に進むと、枯山水庭園や池の日本庭園がある。



Albert-Kahn Museum and Garde アルペール・カーン美術館と庭園

(訪問日：2025 年 3 月 25 日)

2 Rue du Port 92100 Boulogne-Billancourt, France

公式サイト <https://albert-kahn.hauts-de-seine.fr/>



フランスの実業家で銀行家であるアルペール・カーン氏によって造られた庭園。
1892 年にブローニュ・シュル・セーヌ(現在のブローニュ＝ビヤンクール)に
家を借り、そのまま定住した。美術館には、アルペール・カーン氏のコレクションである写真などが展示されている。
庭園には 7 つの風景があり、その中には日本の村と日本庭園の風景がある。

日本の村

日本旅行の際に影響を受け、日本人大工に依頼して 1897 年に造園した。松の木や庭石、灯籠、また実際に日本から運ばれたとされる日本家屋など、日本の風景を縮小させたかのような空間である。



日本庭園

1908 年～1909 年に造園。日本の日光橋を元に作った赤い漆塗りの橋が印象的。しかし、アルペール亡き後、徐々に庭園は荒廃したため、1989 年に造園家の高野文彰が、庭園の改修を行った。アルペール・カーンの人生を元にデザインし、生、死、男女という 3 つのテーマで表現した庭園へ造り直した。フランスに日本庭園の文化と技術を伝達しながら、庭園の維持管理できるよう支援するなど、この改修プロジェクトは、庭園の修復だけでなく、日本庭園の文化を未来に残していくための試みでもあったようである。アルペール・カーンは、「他者を知ることが平和につながる」という思考の元、それぞれ異なる大陸(庭)を一つの空間に収めることで、調和のとれた世界という平和的な世界観を自身の庭園に反映させている。他国との交流が増え続ける現代において、アルペール・カーンの庭園は心に響くものがある。



その他にも、北アフリカのアトラス山脈や水生生物が生息する湿地帯などを想起させる「青い森と湿原」や白樺の木々のある「黄金の森と草原」、カーン氏の故郷であるヴォージュ地方を表した「ヴォージュの森」、フランス式庭園と果樹園、バラ園、英国式庭園など園内には 7 つの風景が見られる。



ヴォージュの森

フランス式庭園

英国式庭園

庭と画家

Claude Monet クロード・モネ (1840～1926 年)

印象派において代表的な画家の一人。

今回は彼が晩年まで過ごしたシヴェルニーの庭について紹介する。

クロード・モネ財団 Maison et jardins de Claude Monet-Giverny

(訪問日：2024 年 9 月 13 日)

84 Rue Claude Monet, 27620 Giverny, France



クロード・モネの邸宅の庭園は 2 つに分かれており、一方は邸宅に面し、邸宅から見渡せる花園「クロ・ノルマン(Clos Normand)」、もう一方は睡蓮や橋が姿を現す日本風の「水の庭(Jardin d'eau)」である。モネはここでは有名な睡蓮シリーズを含めて何百もの風景画を描いた。シヴェルニーには 1883 年に移り住んだ。モネは元々、シヴェルニーに住む以前に、ルノワールなど同世代の画家たちと定期的に集まり、自宅や友人宅の庭などで描くなど、庭をモチーフとしていた。モネを含めた印象派たちは、野外は自由と同義で、情景を細部まで写しとるよりも、自身の感覚や感情をキャンバスに表現することを信念としていた。モネの亡き後、親族が世話をしたが、1970 年代まで放置されていた。そして修復され、1980 年に一般公開となる。4 月～11 月の期間のみ営業なため、訪問時は注意。



写真⑬



写真⑭



写真⑮

写真⑬『睡蓮』の一部、オランジュリー美術館 (2024 年撮影)

写真⑭『睡蓮』(制作年不明)、オルセー美術館 (2024 年撮影)

写真⑮『チュイルリー庭園』(1875 年)、オルセー美術館 (2024 年撮影)

「クロ・ノルマン Clos Normand」では、絵を描くために、庭に花を植え、木を植え替えるなど一年を通して色の移り変わりが楽しめる季節の花を選んでいった。特にアヤメやダリアがお気に入りであった。牡丹やケシなどの多年草や一年草、中央花壇には、薔薇やシャクヤクなどパレットに並べられた色彩を彷彿させるほど沢山の花が咲いている。

「水の庭 Jardin d'eau」は、1889 年のパリ博覧会の際に、ラトゥール=マルリアックの睡蓮の庭園に感銘を受け、水の庭園を作ることにした。地元のエジプト川の流れを変える許可を得て、池を拡張。日本の版画に描かれた橋をモデルに、1895 年に橋(朱色ではなく緑色の橋)を設置した。近くに竹やカエデ、ユリなどを植えるなど、水辺は西洋の庭と日本の庭とが合わさった和洋折衷な空間である。ラトゥール=マルリアックのナーセリーから、ウィリアムストーンやアトロブルペリアなど様々な品種の睡蓮を送られ、品種

の収集を行った。現在も、水庭は庭師たちにより、小さなボートに乗って手作業で不要な植物を取り除くなど毎日手入れされている。水面に反射する空と池の周りの木々などのグラデーションの美しさに目が惹かれた。岸边には薔薇、スピレア、デルフィニウムが咲いており、水面に反射して睡蓮と同様に全体的に調和されている。モネにとって、庭園は歓喜や癒しを得るだけでなく、絵の題材として育ててきた。その絵や庭に対する熱意に感動した。



Pierre-Auguste Renoir ピエール・オギュースト・ルノワール

(1841 年～1919 年)

モネに続き、印象派で代表的な画家の一人で、パリではフレデリック・バジールやアルフレッド・シスレー、クロード・モネの画家たちと親交を深めた。1874 年に開催された「印象派展」に出展し、注目を集める。当時は生計を立てるために肖像画も描いていた。



写真⑩

ルノワールは、主に女性像を描くことで有名だが、同じく庭園にも関心を示していた。

1875 年～1876 年までモンマルトルに住んでおり、アトリエの裏手にある緑地を元に制作していた。1880 年、ルノワールはレストラン Maison Fournaise で友人たちと集っていた。そこで後に妻となるアリーヌ・シャリゴと出会う。レストランでは、カヌーを貸し出しており、ルノワールはカヌーにインスピレーションを得たりもしていた。

アリーヌの故郷である村の Essoyes(エッソワ)に移り住み、最初の庭を造る。庭は約 0.15 ヘクタールで、果樹やブドウの木、野菜などが並ぶキッチンガーデンを造園した。コミューンが土地を購入後、庭はジャングル化していたが、ルノワールの存在感を保ちつつ改装し、2017 年に一般公開となる。

身体の影響により、暖かい気候である南フランスのレ・コレットへ移り、1907 年に農場と 2.5 ヘクタールの土地を購入。庭の形は段のような構造で、窓を庭に面するように邸宅を建てた。菜園用のニンジンやエンドウ豆、ホウレンソウ、トマト、ワイン用のブドウ畑、鶏やウサギの飼育など、ルノワールは、季節ごとの収穫、自然と調和した自給自足の暮らし方を好んでいた。ここには 11 世紀からあったとされる約 150 本のオリーブの木がある。

写真⑱『水浴の女たち』(1918-1919 年)、

オルセー美術館 (2024 年撮影)

写真⑳『草原の坂道』(1875 年)、

オルセー美術館 (2024 年撮影)

写真㉑『陽光のなかの裸婦』(1876 年)、

オルセー美術館 (2024 年撮影)



写真⑳



写真㉑

モンマルトル博物館 Musée de montmartre

(訪問日：2025 年 3 月 6 日)

12 Rue Cortot, 75018 Paris, France

<https://museedemontmartre.fr/>



1960 年にモンマルトルの歴史保存協会により設立した博物館。

モンマルトルは、ルノワールを含めた、ラウル・デュフィ、シュザンヌ・ヴァラドン、モーリス・ユトリロなどが住んでいた地区で、博物館にあるアトリエは、シュザンヌ・ヴァラドンとモーリス・ユトリロの滞在時を再現している。また、モンマルトルの歴史にまつわる絵画やポスター、写真などが展示されている。「ルノワールの庭」と名付けられた庭は、この場所で描いた《ムーラン・ド・ラ・ギャレットのダンスホール》(1876 年) や《ブランコ》(1876 年) といった絵画を基に改修された。自身が訪れた際は、まだ 3 月ということもあり、葉や花は咲いてはいなかったが、近くにサクレクール寺院やテルトル広場などモンマルトルの中心部にありながらも、田舎の雰囲気醸し出しており、落ち着く場所であった。



制作の様子

基本的には、庭園や公園、美術館などでのスケッチを行い、それを元に絵画へ展開した。特に近くのチュイルリー庭園とルーヴル美術館によく足を運んだ。植物や花、噴水の流れる水の音やそこで過ごす人たち、空気感などを感じながらスケッチを行った。また、ルノワールの影響もあり、裸婦を取り入れるために美術館に展示されている石膏像をスケッチしたりもした。パリの美術館や博物館は、館内でスケッチをしても許される。他にも、毎月第一日曜日は全ての美術館が無料になるなど、芸術と身近に触れることができる魅力的なところである。



展示

展示では、滞在時に描いた絵画やドローイング・スケッチを、国際芸術都市でのオープンスタジオとギャラリーでの展示の2回にわたって発表した。友人の協力もあり、様々な方々と交流ができて応援の言葉をいただいた。

国際芸術都市でのオープンスタジオの様子

2025年2月5日(水)に自身の部屋でオープンスタジオを開催。
滞在時に描いた絵画やドローイング・スケッチを展示した。





ギャラリーでの展示

オープンスタジオ開催時にギャラリーを紹介していただき、パリのマレ地区にあるギャラリーでグループ展を開催した。

EXPOSITION COLLECTIVE 「Souvenirs LATENTS」

期間：2025 年 2 月 16 日(日)～28 日(金)

場所：The Muisca - Art space - Galerie d'art - Le Marais 8 Rue d'Ormesson, 75004 Paris, フランス



その他

・フランス語の習得方法

最初は、相模原市文化会館のフランス語レッスンに参加して基礎を学んだ。あとは参考書やアプリ (Duolingo) などを使って独学で勉強をした。現地では、難しい場合は翻訳機を使い、気になる単語や文を見つけたら、記録して調べるなどをした。国際芸術都市では、初級と中級の二つコースのフランス語教室が月に何回か開かれている。1 レッスンにつき 11€(初級コースには 80€/8 レッスンもある。)で授業を受けられる。

・入居者とのコミュニケーション

国際芸術都市にはアートだけでなく、音楽や服飾デザインなど様々なジャンルで学ぶ人たちが、多く滞在している。日本人では、武蔵野美術大学や東京造形大学などの大学生も滞在しており、LINE グループで繋がって皆で鍋パーティーやピクニックなどを行ったりした。

【結び】

現地で得たこと、特に印象に残ったこと

今回、フランスの様々な庭に触れたことで、庭の様々なデザインや形、その背景にある歴史などを知ることができた。古城などにおけるフランス式庭園は、写真で見るよりも遥かに美しく、あらゆる研究や技術などを積み重ねて生みだしてきた人間としての力の強さを大いに感じた。一方で、訪れた人々にとって憩いの場として機能するよう、植栽や施設の設置など工夫している点も多く見られた。歴史的な形を保ちつつも、時代に沿って徐々に変化させていくのは、どの庭においても共通している。

その他においてパリで印象に残ったことは、言葉を大切にする文化という点である。お店に入った時や会計など、店員さんに初めに「Bonjour」などと挨拶を交わすことが必要である。フランスでは、同じ人間同士で接しているという認識のためにも、挨拶などコミュニケーションをとることが大切だと言われている。ギャラリーでの展示の際でも作品に対して意見をよく交わしており、改めて自身の作品をより言語化させる必要性を感じた。また、天気において曇りや雨が多いのも印象的であった。特に冬場は夕方 17 時半から真っ暗になり、朝 9 時まで夜並みに暗い。そのため、パリには冬場は病む人が多いとのこと。その分、夏場や晴れた日は必ず外に出て、庭や川辺などで日光浴をするようだ。雨も突然、通り雨がくることが多いため、折りたたみ傘は必需品である。庭園を含め、日本では得られない文化や歴史、そこでの空気感などに触れることができたことが今回の滞在の一番の収穫である。

渡仏前と渡仏後の制作活動・心境の変化

今回、フランスの様々な庭に触れたことで、より自身の作品制作の幅を広げることができた。庭園や公園で自由にくつろぐ人や動物たち、庭をモチーフに描いていたモネやルノワールの影響もあり、自然との調和やの美しさ、観る人に居心地の良さを感じさせるような作品を制作したいと思うようになった。また、渡仏する直前までは学生で講義や制作を両立した生活を行っていた。しかし渡仏後は、授業などがなく、自分の研究や制作の時間を大いに持てた。1 日をいかに有効的に使うかを問われる毎日であった。今後の作家として活動していく場合、どのように制作を行っていくかを決めるきっかけにもなった。

今後国際的に活躍するための課題・方法

パリでは、作品の意見を交わすことが多く、自身の作品に関してより言語化させることが大切だと感じた。また、2024 年に開催された「第 60 回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展」において、注目されている作品は、立体やインスタレーション作品が多く、印象的であった。自身も今後、多くの人に観てもらうにはそういった三次元的作品へ展開していくことが必要だと感じた。



【参考資料】

書籍

- ・ ALLAIN-Y.M+CHRISTIAN、『L'Art des jardins en Europe』、CITADELLES、2006 年
- ・ Jackie Bennett、『JARDIN D'ARTISTES』、ULMER、2019 年
- ・ ジェラルール・ダルマズ、翻訳 Chikako De Lucia、『モン・サンミシエル』、2008 年
- ・ 進士五十八（著者）、ペンソンマーク & 万里子（英訳）、『進士五十八の日本庭園』、市ヶ谷出版社、2024 年

ガイドブック

- ・『見学用ガイド Château de Chenonceau』、2024 年